

## 子どもの幸福度は、大人からポジティブな対応を受けた経験によって変化する

総合科学系地域協働教育学部門廣瀬淳一准教授による「世代間交流と子どもの幸福度」に関する研究成果が、米国 Public Library of Science の学術誌『PLOS ONE』に掲載され、令和6年6月21日（米国東部時間午後2時）に電子版が公開されました。

近年、子どもの幸福度が注目されています。これまでに、日本の成人を対象とした研究（2022年）において「好奇心からの問いかけ」の傾向と「将来世代への関心度」及び「主観的幸福度」の高さとの関連性について報告されていました。しかし、子どもの「好奇心からの問いかけ」「将来世代への関心度」及び「主観的幸福度」と世代間交流との関係については、あまり知られていませんでした。

廣瀬准教授は、一般社団法人しあわせ推進会議（高知市）及び高知県下3市町教育委員会の協力を得て、小中学生511人を対象に「好奇心からの問いかけ」、「年少者や自然環境への労わり（改訂版の将来世代への関心度）」、そして「主観的幸福度」の関係についてタブレット端末を利用したWEBアンケート調査を行いました。また、廣瀬准教授は子どもと大人の世代間交流の重要性に注目し、子どもが「好奇心からの問いかけ」をした際の大人の対応態度に関するデータも収集しました。

データ分析の結果、子どもからの「問いかけ」に対し、「大人からポジティブな対応を受けた経験」を認識する子どもからは「好奇心からの問いかけ」及び「主観的幸福度」が高い傾向があることが確認されました。さらに、大人のポジティブな対応は子どもの「好奇心からの問いかけ」の傾向を促進し、さらにそのことが子どもの「主観的幸福度」の高さと関係することもわかりました（図1参照）。大人を対象とし2022年の研究と同様、「好奇心からの問いかけ」の傾向が「小さな子どもや自然環境への労わり（将来世代への関心度の改訂版）」においても強く関係することが確認されました。ただし、大人の場合は「将来世代への関心度」と「主観的幸福度」の間に強い関係があることが報告されていましたが、子どもの場合は「主観的幸福度」と「将来世代への関心度の改訂版」の間には「芽生え」と言える程度の小さな関係性のみ確認できました。つまり、子どもの時点においては「次世代への関心度」よりも「大人からポジティブな対応」及び「好奇心からの問いかけ」のサイクルの方が重要であることを示唆しています。

このことから、子どもの幸福度を考える時は、子どもの「好奇心からの問いかけ」に対し、大人が面倒くさがらずに対応することで世代間問答の良いループを作ることが大切である可能性を指摘できます。過去の研究では「将来世代への関心度」が高い大人の側にも「主観的幸福度」が高い傾向が報告されていました。つまり、世代間問答の良いループは、大人

への問いかけに対してちゃんと答えてもらった子ども、子どもからの問いにちゃんと応えようとした大人の双方の「主観的幸福度」を高める可能性があると言えます。

詳細は、以下の資料をご覧ください。

<論文名> How do question-answer exchanges among generations matter for children's happiness?

<和訳> 「世代間の問いかけと応答のやりとりは、子どもたちの幸福にとってどのような意味を持つのか？」

論文掲載URL : <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0303523>

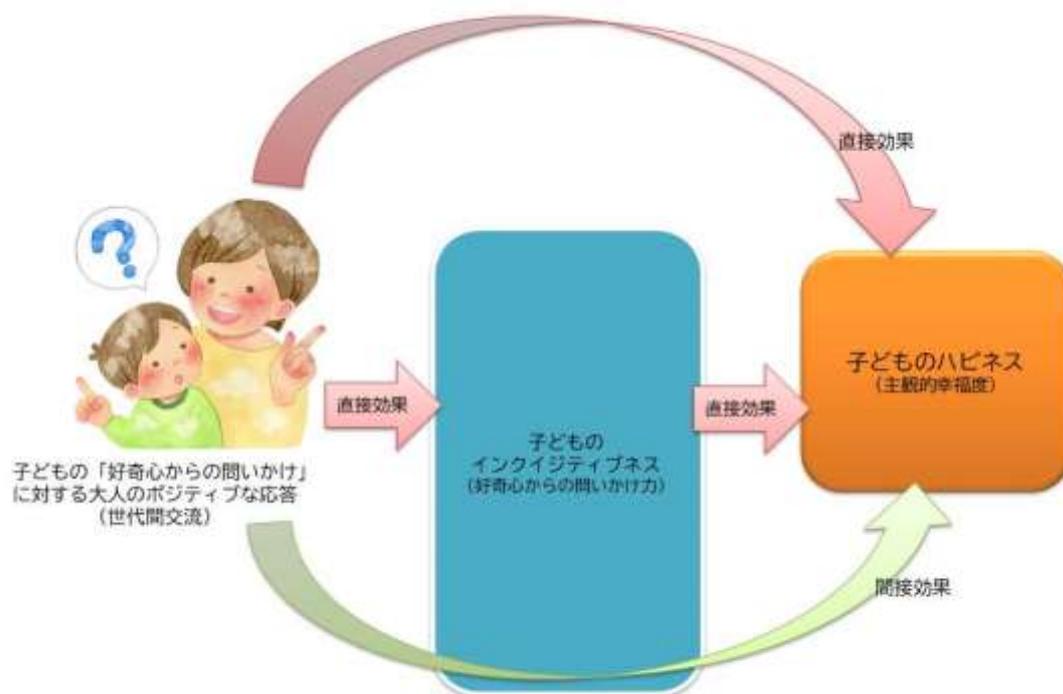


図1. 大人のポジティブな対応、子どものインクイジティブネス、子どものハピネスに関する媒介効果